

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

広がる「幸せ分かち合い」

ネパールチーム 乳井京子

皆さま、こんにちは！地球の木は今年、創立21年目。認定NPO法人の取得を機に機能を充実させ、公正な社会づくりを目指して日々歩んでいます。海外支援プログラムでは、現地の人々に寄り添い、人々の内なる力を引き出す住民主体の支援を行ってきました。

支援の成果

支援の成果が1997年に10クラスの識字教室から始まったネパール教育支援は、支援地を東部のマンガルトール村に移し、高校を拠点とした村の生活向上プログラム「幸せ分かち合いムーブメント」が着々と進んでいます。奨学生たちは、識字教室で母親たちを教えたり、小学校の先生になったり、地域に貢献しています。収入創出プログラムの参加者たちは、新しい野菜作りに挑戦し、山の麓の町まで売りに行って収入を得られるようになりました。そして、よりお金をきちんと返し、融資金は他の参加者に回されるというシステムもできました。

今年度は、この「幸せ分かち合いムーブメント」を隣のカルパチョーク村に広げる計画です。隣村には、すでにユースクラブや協同組合活動をする女性たちがいるとの情報が入っており、二村の交流からどのような「分かち合い」が生まれるのかが楽しみです。

語れるグッズ

「幸せ分かち合いムーブメント」のコンセプトは、地球の木の中でも広がっています。クメールシルクを織る女性たちを支援するカンボジア・クラフトチームは、製品の名を「幸せ分かち合いクラフト」と名付けました。織り手と買い手の顔が見える関係、双方がクラフトを通して幸せを分かち合えるようなフェアトレードが誕生したのです。10年前、「活動を語れるようなグッズがあったらいいね」と言っていた夢が、ついに実現したのです！

CONTENTS

- 広がる「幸せ分かち合い」1
- ラオス 森の絵本作り2
- この指とまれ！ たのしいワークショップをつくらう3
- ラオスからサバイディー4
- 温もりのある「ものづくり」をめざして4
- 東アジアの平和を望んで5
- 気仙沼だより その36
- 私のインターン体験7
- 活動日誌7
- INFORMATION8



国連大学「グローバル・セミナー、かながわセッション」にて

未来に種まき

地球の木には出前講座チームがあって、地球の木の活動やコンセプトを伝えるため、出前講座を行っています。

これまで出前先は小学校、中学校、高校や地域のイベントなどだったのですが、今年は、国連大学の「グローバル・セミナー、かながわセッション」で、ネパールの事例発表をしてほしいという依頼が来ました。国際協力の仕事に就きたいと希望する大学生、院生、社会人が対象です。ネパールの現地パートナー、カマルさんが世界各地で実施しているPRA(参加型農村調査法)のワークショップで村のしくみを知り、村の話し合いで声を上げるのはどのような人が、貧しい人々の声は反映されているのだろうかを体験してもらおうことにしました。そして、指導層、富裕層、中産階級、貧困層、女性たちなどに分かれて、村でもっとも必要とされているものの優先順位を話し合って表にあらわし、発表してもらいました。読み書きできない役の人たちは色分けした紙(村ではさまざまな種類の豆)を使って投票形式で表を作るので、誰が何を必要としているか、一目瞭然です。参加者から「声なき人々の声を聴くことの難しさを体験できた」との感想をもらいました。未来を拓く若者たちの心に「幸せ分かち合い」の小さな種を蒔くことができたとしたら、嬉しい限りです。

詳細は、地球の木HPブログをご覧ください。

地球の木

検索

ゆっくり、^{でも}しっかり進んでます ラオス 森の絵本作り

絵本作家 田島征三さんを迎えての、「ラオス森の絵本」制作の歩みも2年目の半ばを過ぎた。実際の作り手である田島さんと、それを後押しする私たち。しかし、今回の訪問でこの絵本作りが、そんな単純なものではなく多くの人が係わる多彩なものになりそうだとワクワクしてきた。



ルートマニーさんの作品と田島さん

うれしい出会いの旅

田島征三さんとラオス訪問も、3回目となった。今回は、雨季明けすぐの森を見ることも目的のひとつではあったが、田島さんの一番の目的は、「ラオス人絵本作家と出会うこと」であった。それはなぜか。

ラオスの森のことを描く本を、外国人である私たちが勝手に作って日本で出版するというのに、抵抗感があるからだ。それで、ラオス人の絵を本に盛り込み、一緒に制作したいという思いから、人材を探すというものだった。

今まで経験したことのない目的のため、正直結果が想像できない不安があった。しかし振り返ってみれば、たくさんの「出会い」があって、心が温かくなった旅であった。

事前から大変お世話になった「ラオスのこども」の秋元さん、絵本出版に関わっている若手絵本作家3人、タイの2人のプロ絵本作家、「ラオスのこども」の顧問で、文筆家で、絵本の普及や作家の育成を行っているダラーさん、その妹で森の研究にも取り組んでいるドゥアンドゥアンさん、今回も通訳（通訳以上のお世話をかけているのだが）として同行していただいた安井さんとご主人のノイさん、彼の人形劇の師匠ルートマニーさん、芸術学院で版画を学ぶ学生、その先生、画家でもあり情報文化省の役人でもあるチャルンポンさん。

人との出会いだけでなく予定外で芸術学院を訪問したり、アートギャラリーを訪れて、いろいろな作品も見ることができた。（ピエンチャン市内に現代美術のギャラリーがあることも驚きだった）

出会う人が多かったということは、それだけこの絵本について語る機会も多かった訳で、田島さんのこの絵本に



たくさんの人との出会いがあった

する考えを心の中で反芻することができた。

チャルンポンさんに、ラオス国内のアーティストへの声かけをお願いしたとき、この計画の現実的な部分について質問があった。それに対し、「もう3回もラオスを訪れているが、この絵本はそのわりには儲からないかもしれない。しかし、ラオスの森の問題は日本にも関係することであり、日本人が知らなければいけないことだ。情熱だけでやる仕事なのです」という田島さんの答えには、ぐっときてしまった。チャルンポンさんは、「協力しましょう」と答えてくださった。

簡単に作ろうと思えば作れるものなのかもしれないが、ひとりよがりの作品は作りたくない、との強い思いで進んでいく田島さん。国を超えていろいろな人と出会うことで、その人たちのことばや思いまでも、絵本の土台となっていく。困難も多く、時間もかかるかもしれないが、土にしっかりと根をはった花が咲くことだろう。土が耕され豊かになっていくように、絵本の土壌ができあがっていく。

確かな一歩 ~取材に同行して~

私にとってラオスは初めての国だったが、滞在がピエンチャンだけだったせいかあまり特徴は感じなかった。それに比し、3度3度食事を共にし、縦横無尽にたくさん話を聞かせてくれたバリバリのアーティスト田島征三さんのインパクトは絶大であった。かなり涼しくなりかけた日本から行った身にラオスの蒸し暑さは格別で、私は時に負けそうになったが、田島さんはそう見えなかった。切り拓くような前進力で毎日新しい人と会い、面白い絵を求め、その力強さ。日本で次々と人々をまきこんでいる田島さんの魅力がラオスまで延びて行き、彼の地の人々をも、つなぎ始めたかのようだった。

地球の木が言い出しっぱの絵本作り。それは、開発で森が消えていく時、森の精霊ピーはどこへ行くのだろうかという素朴な疑問からだった。田島さんが考え出した、コンピュータを使ってラオスの作家の作品をも取り込んだ新しい絵本はどんなものになるのだろうか。

(会報作成チーム 斎藤 和子)

* (ラオスのこども) : ラオスの子どもたちの教育環境の向上を願い、日本およびラオスで活動を行っている国際協力NGO。

出前講座チーム発! この指とまれ! たのしいワークショップをつくろう



地球の木の活動の2本の柱は、海外支援と地球市民教育です。ラオス、カンボジア、ネパールで困難な状況にある人々の自立を支援する中で、貧困、環境破壊、人権侵害など世界の構造的な問題が浮き彫りになってきます。それらの問題を生活者の視点で伝え、公正で誰もが幸せを感じる社会を創っていくことが、地球の木のミッションであると考え、私たちは日々活動しています。

地球の木には、フィリピンの支援から生まれたオリジナル教材「マジカルバナナv3」をはじめ、「ネパール・タル一族の家族ゲーム」「ネパールわくわくワークショップ」「ラオスの森~村のくらし」「世界がもし100人の村だったら」「援助する前に考えよう」など10種類にわたる多彩な出前講座のメニューが揃っています。

今年度も、「かながわ湊フェスタ」での「マジカルバナナ・ワークショップ」を皮切りに、平楽中学校の「国際学習」、鎌倉女学院高校の「国際セミナー」、真光寺中学校の「国際交流の日」、洗足学園中学校の「ボランティア体験学習」、横浜単人高等学校の国際学習など、学校や地域で9つの出前講座を行い、ファシリテーター（出前講座の進行役）の養成にも力を入れてきました。

8月には、開発教育協会の全国研究集会で「地球の食卓」という、おもしろそうなワークショップが体験できるというので、チームメンバー3人が勉強に行きました。このワークショップは2種類の教材を用いて行います。

一つ目の教材「フォトランゲージ」は、世界の様々な国のある家族とその一週間分の食料を写真に収めたものです。まず、写真の中の散りばめられた情報からどこの国かを読み取る「国当てクイズ」をします。大型冷蔵庫の置かれたダイニング・キッチンに、溢れんばかりの食べ物をとところ狭しと並べた写真もあれば、背景にテント、家族の前には穀物の袋が3つ並べられた写真もあります。世界の様々な食卓から、それぞれの社会のあり方がうかがえます。

もう一つの教材「フードマイレージ」は、名前の示すとおり、食料の輸送距離から私たちの暮らし方を考える教材です。この教材には、カレー、ラーメン、焼きそば、シーフード・スパゲッティ、けんちん汁など、日本人がよく口に

立に使われる食材の重量(g)、食材がどこの国からやって来て、どのくらいの距離(日本の場合km)を旅してきたか、という情報から、重量×輸送距離=「フードマイレージ」を計算します。

遠くの国から輸入した食材を使ったメニュー、例えば、イタリア産のスパゲッティにタイで採れたエビ、中国産のグリーンピースなど輸入食材を多く使ったシーフード・スパゲッティのフードマイレージは、国内産の食材を使ったけんちん汁と比べると、ゼロが一つ多くなります。輸入食材がいかに燃料を消費し、CO2を多く排出して、環境に負荷を掛けているかが一目瞭然。地産地消の大切さがよくわかる仕組みになっているのです。

お金やモノをあげるだけの一時的な支援ではなく、世界に不正をもたらししている、私たち自身の「暮らしを見直そう」というスローガンを掲げて地球市民活動を続けてきた地球の木にはピッタリの内容です!これから出前講座チームでは、この2つの教材を活かして、地球の木らしい内容のワークショップを創っていきます。

「地球の食卓~地球の木版」のワークショップづくりと一緒にやってみようかな……と思う方、出前講座のアシスタントをやって下さる方、大歓迎です。

(出前講座チーム 乳井 京子)



3枚の写真は、開発教育教材「フォトランゲージ」より

ラオスからサバイディー (こんにちは)



村で行った緊急会議

皆さま、はじめまして。2012年8月末より、ご支援頂いているラオス、サワナケート県における森林保全、農業・農村開発活動に加わり、現地調整員(プロジェクト・マネージャー)としてラオスで活動している林真理子です。

ラオスに来て、早2ヵ月が経ちました。初めの3週間は引き継ぎを受け、その後首都ビエンチャンで1ヵ月語学研修を受けました。ラオスに到着してすぐは、生活に慣れず仕事にもついていくのも大変で、2~3日は体調を崩しましたが、今ではすっかりラオスの生活に慣れました。

JVC事務所にはラオス人スタッフが12人います。ほとんどのスタッフは英語を話さず、活動している村でもラオス語しか通じない(一部の村は少数民族で、独自の言葉しか話しません)ので、ラオス語の習得は活動において必須となります。歴代の日本人スタッフはほとんど皆ラオス語を流暢に話していたようなので、プレッシャーを感じています。

サワナケートに戻りまだ数日しか経っていないため、村での実質的な活動等にはほとんど関わっていませんが、先日ある活動地の村人から「企業が村の土地を安い価格で買いたいと言って突然やってきたが、土地は売りたい。どうしたらよいか教えてほしい」と連絡を受けました。急ぎよその村へ行き事情を聞いたところ産業植林をしている外国企業が土地売却の交渉に来たそうです。しかし、一旦土地を奪われてしまうと村人は自給自足の生活を送ることができなくなってしまいます。ラオスでは政府の政策(法律)によって村の土地を登記することで土地を保有する権利が生まれます。そこで、JVCは、村人が自分たちで土地を守れるようこの政策について話をしました。

このような問題は頻繁に起きています。実際に土地を失い生活に困っている村人の話もたくさん聞きました。改めて、このようなNGOの活動が草の根の人たちの生活を守るために重要であることを実感した一日でした。

ラオスの人びとのためにしっかりと活動していきますので、引き続きご支援をお願いいたします。

(JVCラオス事務所 林 真理子)



事務所スタッフ会議 全てラオス人

温もりのある「ものづくり」をめざして

地球の木の「しあわせ分かち合いクラフト」は、織物やバッグ、ポーチなどのグッズの生産・販売を通して、生産者(困難な状況にある人たち)の生活を支えていく自立支援をおこなっています。今、クラフトチームがめざしているのは、健康で持続可能性のある生活を感じられる「スローな温もりのあるモノ」をカンボジアの人たちと一緒に作っていくことです。

わたしたちが失くそうとしている「手作り」が
まだここカンボジアにある

はじめてカンボジアの織物の村を訪れたとき感じたのは、「わたしたちが失くしてしまった手作りが、まだここカンボジアの日常生活の中にある」という懐かしいような、羨ましいような、複雑な気持ちでした。もちろん圧倒的な貧困の中ですから、そんなことは手放しに言えることではありません。ですがわたしたちの、便利で快適な生活の中からすっぽり抜け落ちていく「手作りの温もり」がまだカンボジアに残っているなら、その技術をすたれさせずに残していくって欲しいと思わずにはいられません。



箆を手に持つ織り機の製作者たち

日本で一度は消えた竹箆(たけおさ)が、
今も商品としてあり、使われている

「箆」は機(織り機)の重要なパーツです。糸を順並べて織物の中と経糸の密度を決める櫛の歯のような道具です。日本ではずいぶん前から竹箆が生産されなくなっていました。特殊な技術を持った職人さんがやめてしまい、後継者がいないとその技術は途絶えてしまうのです。数年前から文化庁が復活させるために大きなお金を使って後押しをしているそうです。いまはステンレスの箆が主流で、竹箆はほとんど海外からの輸入に頼っている状況と聞きます。日本では途絶えた竹箆が、カンボジアでは現役で商品として売られていて使われているのです。アン村の機作りのおじさんは、この竹箆をセットして機をつくっています。「自分が作る機は織りやすいよ」と自慢げです。

この竹箆というものは、竹で出来ているので「しなり」があります。金属にはないこの「しなり」を利用して、細い経糸で密度のある素晴らしい織物を織ることができるのです。カンボジアのアンティークの織物をよく見ると、おそろしく細いしなやかな糸で織られているのがわかります。しかしカンボジアでも今は竹箆が金属箆におされていて、作っているのはタケオの1ヵ所だけで、シムリアップからも注文がきているそうです。こうした職人技の粋ともいえる竹箆。一度なくした伝統・技術はそう簡単にはよみがえりません。その貴重さをカンボジアの人たちにも日本の人たちにも伝えられたらと思います。

(クラフトチーム 大藪 明恵)

東アジアの平和を望んで



絵を描く子どもたち

尖閣諸島問題が外交・経済をはじめ、文化交流にまで暗い影を落とすなか、中国を訪れる貴重な機会を得た。「南北코리아と日本のともだち展」の活動の一環である延吉(えんぎつ)子ども図書館との交流のため、10月13日から16日まで、吉林省にある延辺(えんべん)朝鮮族自治州の延吉市を訪問した。今年で12年目となる「ともだち展」に地球の木は継続して参加している。

「中国日報」英語版に目を通す。経済成長にかげりが出ているものの、観光・保健医療・

教育・高級車業界は景気よし。アフリカへの経済進出も好調、3~5年後にはEU、アメリカを抜いて第1の貿易パートナーになる予測。莫言氏のノーベル文学賞受賞など元気な中国を示す記事がトップを飾る。

北朝鮮・ロシアの国境に近い延吉市は人口の半数が朝鮮族の都市。町中の標示・看板にハングルと中国語が併記されている。日韓併合時代に日本軍がこの地で多くの人を殺戮した歴史があるが、日本人と聞いても敵対視する様子はなかった。反日の標語を書いた赤い横断幕が張られた通りはひっそりとしていた。

今年は延辺朝鮮族自治州ができて60周年。これを記念して立派な博物館ができていた。歴史の展示室では、朝鮮族の人たちの歴史が写真と共に展示されていた。清朝の時代に生活が苦しかった人たちが朝鮮半島から開拓者として入植した。荒れ地を耕し、水田を作ることに成功した。日韓併合後は満州の開拓のため移住を強制された人々がいた。延吉はまた、抗日運動の拠点となった場所でもあった。日本との関係が深い地域である。歴史に翻弄され、厳しい時代を生き抜いた民族のストーリーが浮かび上がる。

14日午後、図書館でともだち展のワークショップが始まった。30人ほどの児童が集まってくれた。JVCの寺西さんが丁寧に、ピョンヤン、ソウル、東京で行った交流やともだち展について説明する。子どもたちに描いてもらったのは、友だちをたくさん作るための特殊能力を持つキャラクター。難しいテーマと思いきや、子どもたちはすぐに取りかかり、かわいいスーパーマンや羽をつけたキャラを描いてくれた。「楽しいお話がいっぱい話まったふるしきを持って、あちこちに撒いて友だちを作ります」「友だちのために怪獣をやっつけます」と子どもならではの発想が楽しい。

帰国後、図書館の李玉花さんがメールをくれた。「延吉の子どもたちは、ともだち展を通して日本という国と日本の心をとて身近に思えるようになりました。日本の子どもたちが学校や家でどのように過ごすのか関心を持つようになりました」。図書館に来るたびに、自分たちの作品が今後どのように展示されるのか聞いてくるそうだ。

ほんの短い訪問であったが、出会った中国の人たちは、国が主導していることと自分たちの生活を冷静に分けて考えているような印象を受けた。テレビの報道を見て中国人に偏見を持つ日本人も少なくない。平和な東アジアを作っていくためには、国と国の関係を超えた草の根の交流が大切であると思うと同時に、歴史から学び、広い視野を持つことが重要だと改めて心に刻んだ訪問となった。

(理事長 丸谷 士都子)

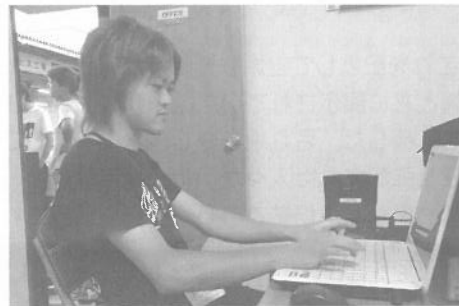
2月には東京で「南北코리아と日本のともだち展」が開催され、この延吉の子どもたちが描いた絵やキャラクターも展示されます。



漢字とハングルの看板が混在する街中

気仙沼支援報告 気仙沼だより その3

地球の木が支援している気仙沼のNPO「Tree Seed」では、介護予防のデイサービスや仮設住宅での支援活動の他に、震災の記録を残す「アーカイブ作成」や「聞き取り取材」などの活動もおこなっています。このアーカイブを担当する西城裕太さんは、震災後の混乱の中、定時制の学校に通いながら、IVY気仙沼のキャッシュ・フォー・ワークに参加し、卒業後は、「気仙沼の復興に寄与したい」とNPOになった「Tree Seed」のスタッフになりました。得意のパソコンも磨きがかかり、その成長ぶりは目を見張るほどです。



パソコンに向う西城さん

地球の木のみなさん、こんにちは！

震災当時は仙台にいました。やっとの思いで気仙沼に帰ってきた時に見た町の光景に唖然としたのを覚えています。それから約2ヵ月後、5月17日にIVY気仙沼の一員としてがれき撤去に参加し、仮設住宅が出来てからは食料品の移動販売を3月末まで行って行っていました。

今、担当しているのは、気仙沼市内の定点撮影や、住民の方へのオーラル（聞き取り）取材などです。取材したものは、「3.11まるごとアーカイブス」の「気仙沼地区サイト」に公開しています。

気仙沼市の定点観測は「写真集団 鼎」の協力もあり被災前の市内の様子が写った写真の提供をしてもらい、被災直後や現在の町の様子などのデータ収集活動をおこなっています。自分自身もですが震災後1年半が過ぎて震災前、津波直後の町の記憶が薄れてきています。今は記憶の中になく存在しない気仙沼市をいつまでも忘れないで、後世に

厳しい冬を迎え、「Tree Seed」では次のような品々を必要としています

ストーブ(ファンヒーター)、冬用シーツ(未使用)、湯たんぽ、懐中電灯、火災報知機、消火器、加湿器、シーツ(未使用)、タオルケット(未使用)、毛布(クリーニング済み)、電気毛布(カバー付き)、DVDプレイヤー、床用マット(未使用)、ラジオ、雑巾、ココロコ(スペアテープも)ご寄付いただける方は、地球の木事務局までご連絡ください。(Tel 045-228-1575)



ボランティアツアーの案内をするスタッフ

残す手段として写真や映像はとても意味があると考えています。オーラル取材では商店を営んでいた方や被災に遭われた方々を中心に地震直後から現在までの生活の様子、気持ちの変化等の話をビデオに撮る活動をしています。撮った映像をパソコンのハードディスクに取り込み、編集ソフトを使用しての映像編集を行ったりしていますが、僕自身パソコンの操作が好きでソフトウェアに関して学びたいので同時に学ぶことが出来るととても勉強になります。

ずっと気仙沼に住んでいますが、改めて写真の撮影や写真収集を行っている、今まで自分が知らなかった気仙沼市が見えてくるのが何より楽しいです。これからこの気仙沼市がどう変化していくのか？その変化の過程を写真、ビデオに収めることも楽しいです。

一方で、オーラルの取材中に取材対象者が震災当初の記憶を思い出して涙を浮かべる姿を見ながら取材を続けることがとてもつらいです。対象者のメンタル面を考慮しながら取材を続ける事がとても大切だと思っています。

(Tree Seed 西城 裕太)



仮設住宅のまわりの草刈り

地球の木は、若い人たちからシニアまで国際協力について学びたいという人々をインターンとして受け入れてきました。学ぶ場を提供すると同時に、私たちも大きな刺激を受けています。これから若い人たちが国際協力を続けていく一助になり、地球の木の活動が広がっていくことを願っています。



「私のインターン体験」

桜美林大学 3年 千原 梨沙

地球の木との初めての出会いはちょうど1年前、2011年の横浜国際フェスタでした。その頃の私は大学の国際協力研修でフィリピンを訪れてから3ヵ月が経ち、自分が日本にいながらフィリピンで出会った人たちのためにできることはなんだろう、また、たとえお母さんになったとしても国際協力を仕事として続けるためにはどうしたらいいのだろうと模索していました。そんな中、バナナのフェアトレードを題材にしている教材「マジカルバナナ」の存在を知り、丸谷さんとお話ししたりして、フィリピンでは現地NGOがかなり上から目線の援助をしていると感じていた私自身にも、「援助」ということについて途上国の方たちを見下しているという姿勢があったことに気づかされました。このこともあり、私は支援国の人たちに寄り添って活動をしており、かつ、子どもを持つお母さんになっても活動をしている方が多いこの地球の木でインターンをさせてほしいと心に決めたのです。

これまで、実際に地球の木が行っているさまざまな活動に参加させていただき、マジカルバナナのリーフレットづくりや実際の説明、たうんチームのミーティング参加、イベントでのクラフト販売などを行いました。その中で特に難しいと感じたことは、国際協力に興味のない方にどのようにうまく興味を持ってもらうか、そして、どのようにしてうまくファシリテートをするかでした。2012年にバンングラデシュに研修へ行き、現地NGOを見学した私は上から目線の開発をしないためにも、村の人々に寄り添って意見をうまく引き出す／聞き出すファシリテーターは重要だと感

じました。しかし実際は初めて会った人とすぐに打ち解けることは案外難しく、私は伝えたいことが多くてどうしても一方的になってしまうか、誘導してしまいがちになってしまいます。実際にやってみてファシリテーターの難しさがわかりました。

さまざまな機会に、地球の木に携わっている方たちからお話を聞きました。その方たちのいろいろな考え方を知るうちに、固定観念がとても強かった私は、以前よりも複数の視点から物事を考えられるように変化しました。地球の木の中心にいる方々だけではなく、地球の木を支えてくださっている方々の、外からの意見も聞くことができたので、内からの考え方と外からの考え方のギャップを知ることができ、私にとってはとてもよい経験となりました。また、多くの経験を積んでいらっしゃる方々の話を聞いたという面でも、とても貴重な機会を与えられています。私は現在、さらに地球の木の会員の方々の生の声を聞き、会員の方が考えている地球の木のあり方を知りたいと思っています。

この様々な人の声を聞くということは、日常生活においても大切ですが、将来NGOを運営していく際にとっても大切なことだと私は感じています。これから自分が進むべき方向性に関しては模索中ですが、このインターンの機会を利用してチャレンジを繰り返すことで、様々な人と出会い、自分をもっと大きくしていきたいと考えています。



マジカルバナナの説明をする千原さん(左)

活動日誌(9月~11月抜粋)

- 9月 4日 国連大学グローバルセミナーでワークショップ
- 5日 フェイスブック講習会(技能会館)
- 14日 プログラム連絡会
- 19日 第4回理事会
- 25・26日 気仙沼訪問
- 27日 地球の木パワーアップ講座 第1回
- 30日 ひらつか市民活動センターまつり参加
- 10月
- 6・7日 グローバルフェスタJAPAN2012参加
- 13日 東戸塚デポー展示会
- 15・16日 南林間デポー展示会
- 17日 地球の木パワーアップ講座 第2回
- 18日 第5回理事会
- 20・21日 よこはま国際フェスタ2012参加(象の鼻パーク)
- 22日 中間監査
- 24日 かながわ国際交流財団 国際交流基金授与式参加
- 25日 ロシ・ラホールを読む会

- 26日 祈り題目展示会参加(妙法寺)
- 26~31日 ラオス訪問
- 27日 フォーラム・アソシエ文化祭参加(オルタ館)
- 28日 かまくら国際交流フェスティバル2012参加(高徳院)
- 31~11/1 大黒まつり出店(孝道山)
- 2~4日 白根地区センター文化祭出店(白根地区センター)
- 7日 島村さんインドシナ勉強会(サポートセンター)
- 8・9日 のぼりとデポー展示会
- 14日 あーすフェスタ実行委員会
- 16日 大丸デポー展示会
- 17日 オルタ館フェスタ参加(オルタ館)
- 19日 第6回理事会
- 19・20日 東寺尾デポー展示会
- 20日~12/4 ネパール評価訪問
- 21・22日 らいふたうんデポー展示会
- 23~26日 カンボジア訪問
- 28日 つなしまデポー展示会

幸せ分かち合い年末募金 ～がんばる笑顔を応援してください～

皆さまの日頃の地球の木の活動へのご理解、ご協力に心より感謝いたしております。また、毎年年末募金の際には、多くの方々から温かなお気持ちをお寄せいただき、支援の大きな助けとなっています。今年も、ネパール、カンボジア、ラオス、そして被災地の人たちと、幸せを分かち合えるよう、皆さまからの温かい募金をお願い申し上げます。詳細は、同封のチラシをお読みください。



「市民がつくる新しい“希望社会”」キックオフフォーラム 「若者たちとつくる希望社会」

日 時：12月1日(土) 13:30～16:30
場 所：関内ホール(JR・市営地下鉄関内駅)
主 催：市民がつくる新しい“希望社会”実行委員会
後 援：IYC(国際協同組合同年) 神奈川県実行委員会
申 込：地球の木事務局

「若者たち」と「働くこと」に焦点をあて、パネリストの実体験などをもとに、希望が持てる社会とは何なのかを、いっしょに考えます。

よこはま国際フォーラム2013

日 時：2013年2月 9日(土) 11:00～19:00
2月10日(日) 11:00～17:00
会 場：JICA横浜(みなとみらい線馬車道駅より徒歩8分)
主 催：よこはま国際協力・国際交流プラットフォーム運営委員会
よこはま国際フォーラム2013プロジェクト

国際協力・国際交流・在住外国人支援・多文化共生に関わる団体や機関が一堂に会し、市民を対象に活動紹介、様々な講座やワークショップを開催します。

2012地球の木講座「ブータンと日本」

日 時：2013年2月17日(日) 13:30～16:00
場 所：開港記念会館
(みなとみらい線日本大通り駅)

今回も「聞いてよかった!」と思える講座を企画しました。「幸せの国、ブータン」のGNH(国民総幸福量)、その考え方と取り組みは?また日本でも取り入れることができるのでしょうか?講師の草郷孝好先生のお話は、とてもわかり易いと評判です。

詳しくは、同封のチラシをお読みください。

地球の木カレンダー2013 「大地にうたう」



2013年カレンダーの準備は、お済みですか?
長倉海洋さん撮影の元気な子どもたちが、皆様に毎月お目にかかれますように...

第12回南北コリアと日本のともだち展

朝鮮半島と日本に住む子どもたちの絵画を集め、私たちの住む北東アジアの平和について考えるともだち展。今年も日本・韓国・北朝鮮そして中国から「ともだちといっしょに行ってみたいところ」のテーマで展示します。また各地でのワークショップで子どもたちが制作したキャラクターも大集合。週末にはギャラリートークも。

日 時：2013年2月21日(木)～24日(日)
平日は12時半より、土日は10時より17時半まで
場 所：こどもの城(JR渋谷駅、銀座線表参道駅)
観 覧：無料
問合せ：ともだち展実行委員会事務局
03-3834-9808

ネパール評価報告会

日 時：2013年3月3日(日) 13:30～15:30
場 所：かながわ県民活動サポートセンター702号室
参加費：資料代 300円

少数民族の参加型村づくり「マンガルタール村 幸せ分かち合いムーブメント」が始まって5年が経ちました。2012年11月に村の人たちと一緒に評価を行いました。その結果をご報告します。



書き損じハガキ、未使用切手が ありましたらご寄付ください

印刷ミスや書き損じで未投函のハガキを地球の木へご寄付ください。また、引き出しの中に眠っている未使用切手がありましたらご寄付お願いいたします。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。